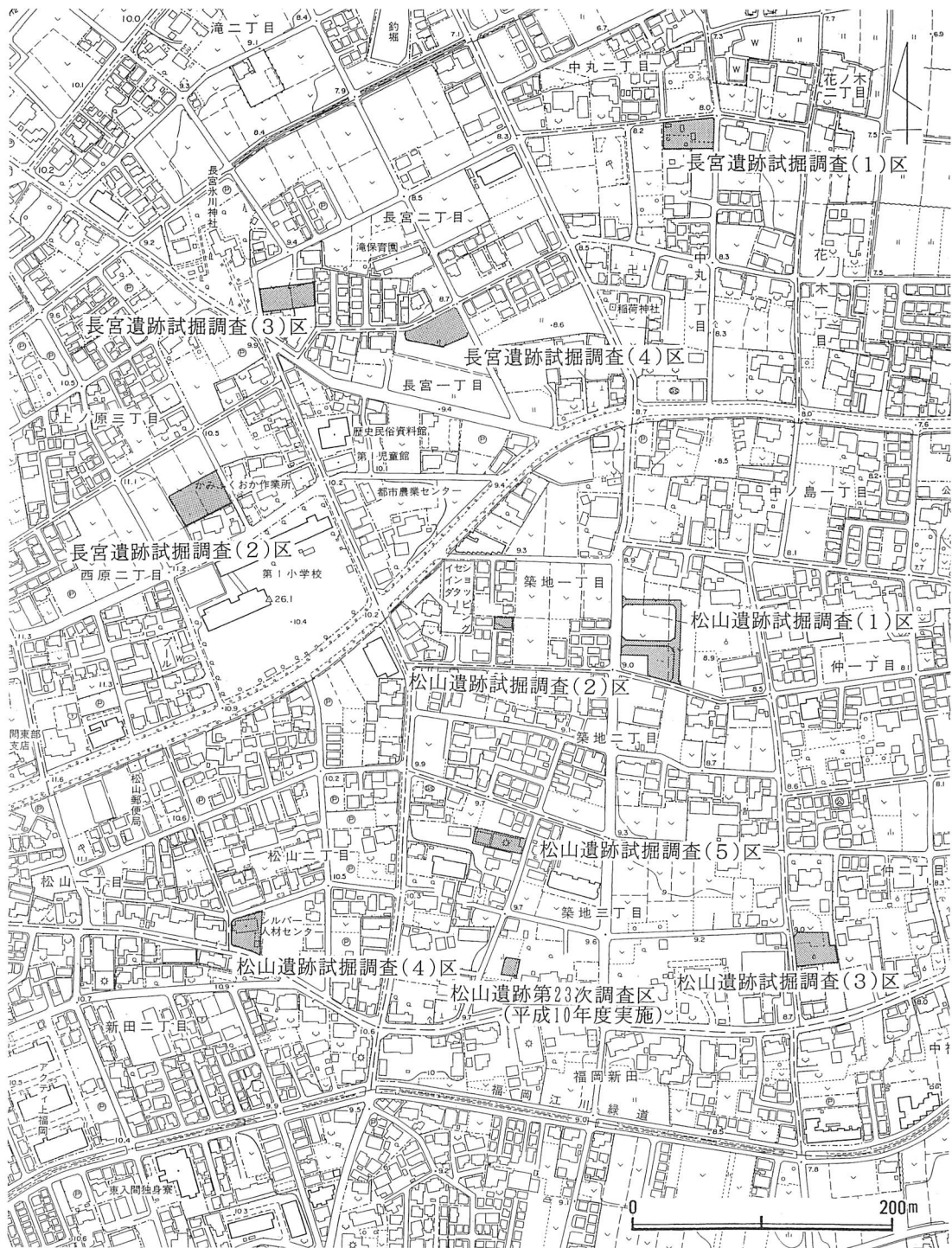
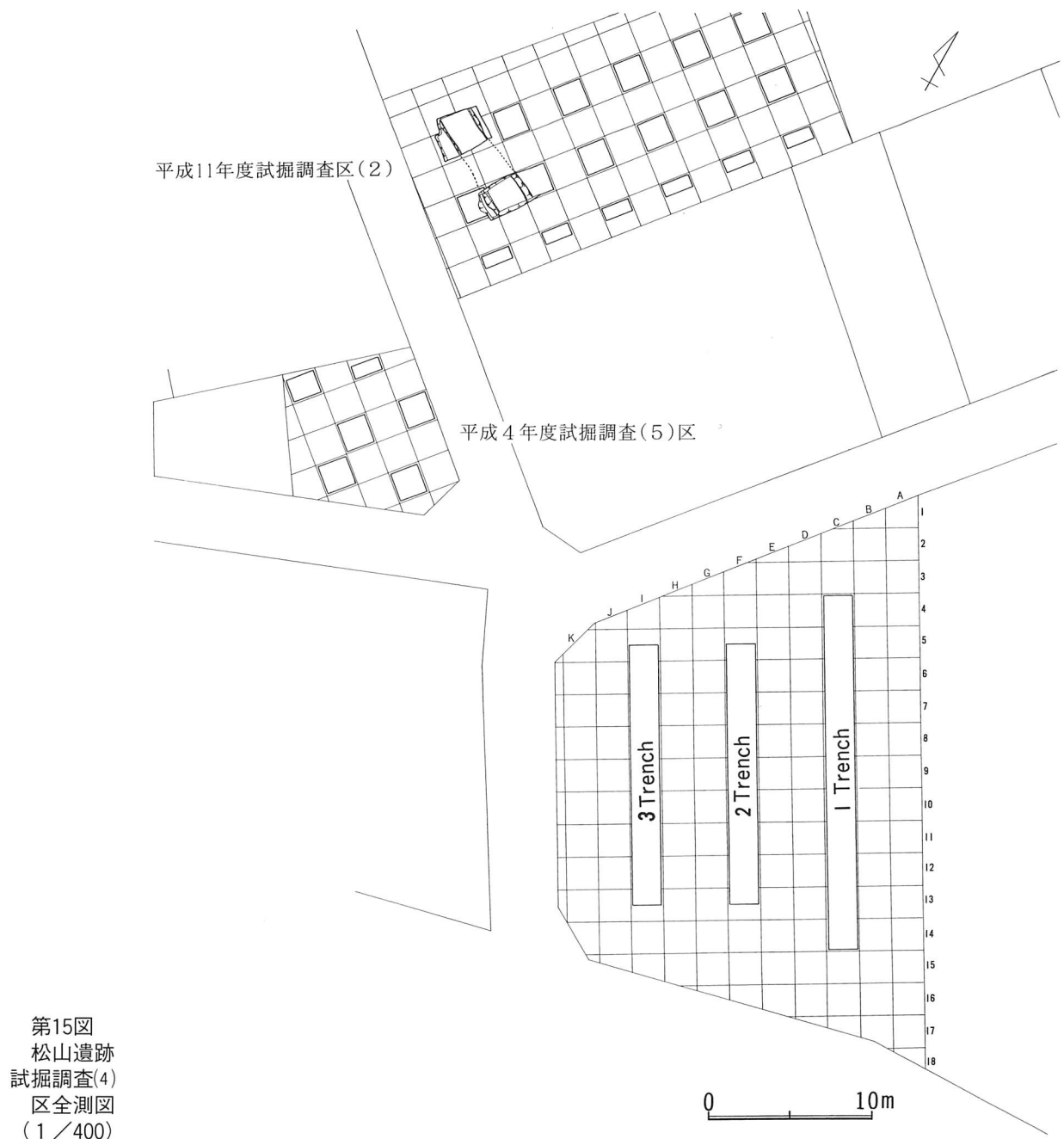




第1図 遺跡位置図 (1/15000)



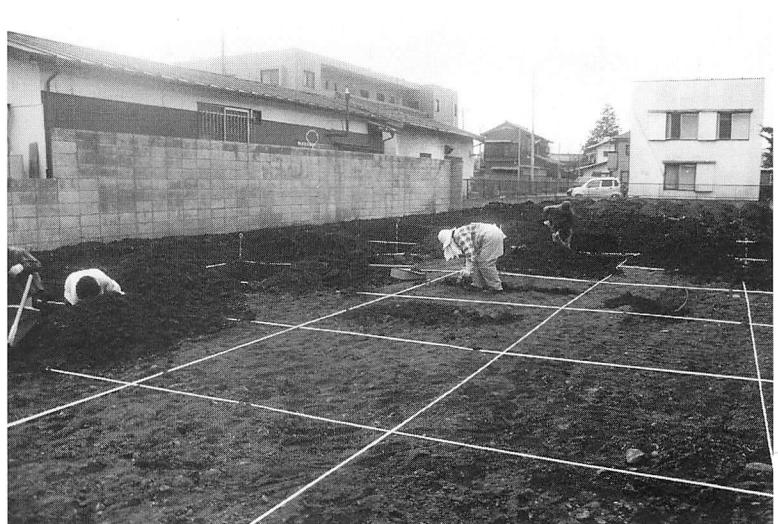
第8図 長宮遺跡・松山遺跡調査区位置図 (1/5000)



第15図
松山遺跡
試掘調査(4)
区全測図
(1/400)

XIII 松山遺跡試掘調査(5)

所在地 築地3-1-28
原因 宅地造成(土地分譲)
調査面積 614m²
調査期間 H13.2.2.～13.
調査担当 柳沢健司
出土遺物 須恵器破片、土師器甕
遺構等 竪穴住居跡1軒、溝1条



松山遺跡試掘調査(5)表土除去作業風景(東より)



松山遺跡第25号住居跡全景(南より)

調査区の位置は、奈良時代の住居跡である4号住の確認された第3次調査区の東隣であり、4号住よりやや新しい12号住の確認された第18次調査区の南隣にあたる。

2月2日、南西隅の土地境界杭及び南側土地境界線を基準に2mグリッドを東へ向かって1～21区、北へ向かってA～H区を設定し、人力にて表土除去作業を開始した。旧工場跡地であるため、基礎等に使用された砂利やコンクリート塊などが表土に混じり表土の除去には苦慮した。地表面からローム面までは50cmで、表土は工場建設及び解体撤去の工事が行なわれているためかなり攪乱されている様子がうかがえた。遺物は、土師器の破片が微量に出土している。2月8日、第20区列にて断面逆台形の溝を確認した。B-20区にて調査区の範囲で幅1m以上、底面70cm以上であり、覆土の堆積状況から2/3の調査を行なったと考えられる。溝の確認面は、周囲よりもさらに50cm低かった。覆土の状況は、50m北方の第11次調査区の溝2の延長線上にある溝であるにもかかわらず砂質土がみられず、最下層は黄褐色で締まりが悪くやや鉄分を含む土であった。

2月9日、G-13区で遺構の覆土と考えられる暗褐色土層を検出した。そのため、拡張作業を行なった。13日、確認面の精査を行なっているとH-14区にあたる部分で焼土粒子を含む粘土質の層が確認され土師器甕の破片が出土した。そのため、H-14区列部分をさらに拡張すると土師器甕が潰れた状態で2個体出土した。また遺構の性格を確認するため暗褐色土層にサブトレンチを入れたところ5cmくらいで床面が検出された。

隣のグリッドで遺物を全く検出しなかったためカマドの潰れた甕とプランの北西隅が残存した竪穴住居跡の残骸と考えられる。当日中に調査を終了し、埋め戻しを重機で行なった。



第16図 松山遺跡試掘調査(5)区全側図 (1/400)